アーレントの言うように公共空間において個々の市民に「正しいこと」を言うことを期待するのではなく、その素直で固有的な視点から展開される「意見」を言うことを促すべきであり、その意見の妥当性とは無関係に意見を言う権利を認めるべきであるというのには共感できます。その視点から見ると、現在のポリティカルコレクトネスはニューレフト以来作り上げられた新たな行動規範への絶対的服従を全市民に要求する点で、アーレントの公共的自由の概念と両立不可能なように思います。しかし、同時に、公共空間での言論の自由が逆にステレオタイプなどの固定化に繋がる可能性もあると思います。つまり、ポリコレの規範に則せず、例えばある人種的マイノリティーをそのステレオタイプでのレプリゼンテーションとしてしか捉えていない人間が、公共空間において言葉の力によりさらにその表彰を固定化、強化していく言論活動を行うことは、かえってそのマイノリティーの公共的自由（the freedom to be acknowledged for their deeds and words) をそこhなうのではないでしょうか。複数人の自由とは両立できるのでしょうか。

功利主義で考慮される帰結とは個人の厚生ないし福利だけであり、帰結の良し悪しは個人にとって効用をもたらしたかという一元的な基準で決まります。この時の効用は測定不可能ではないでしょうか。快楽説では幸福、効用を快楽と安直に解釈しており、ショーペンハウエルのような禁欲的な幸福を無視しています。選好充足説では各個人が自分にとっての最善の選択をする能力があるという非現実的な前提の上に成り立っております。客観的リスト説では人間の根本的な自己決定権を制限してしまい、自分にとっての最善の生き方を規定されることで歯車に成り下がりかねません。私が思うには、功利主義の最効率なメソッドは、教育によって全ての人間が自らの幸福を判別できる能力を持つようにし、それ以降の効用の追求は各人に任せることです。矢澤先生は幸福の最大化を最も効率的にできるような功利主義のシステムはなんだと思いますか。

P.シンガーのラディカルな功利主義では途上国など最も貧しく困難なものを救済する義務が先進国や恵まれているものにはあるとしています。このような行為規則は、功利主義の根本理念である結果説と矛盾するものではないでしょうか。結果説では最善の結果をもたらす行為をとるべきであり、カントの定言命法のような普遍的な正義に根ざした義務は存在しません。P.シンガーの立場では、恵まれているものが貧しいものを助けるという義務は結果によって正当化される（つまりそれが効用を最大化する行動である）ものなのでしょうか、それとも効用とは無関係の道徳則なのでしょうか。

ロールズはあらゆる社会的不平等や不遇を乗り越えたところにある公正を正義としているが、生来の資質の違いにより生じる成功の度合いの違いについては容認している。格差原理により生得の資質により優位に立っている人間の利益増大は、同時に最も不遇な人間の利益にもなる場合に正当化されるとしているが、それでも依然として生来の資質の差による社会的地位や獲得できる利益に差が生じることを容認どころか、機会均等の原則の元では肯定している。しかし、このような生来の能力の差も個人がどうしようもできないuncontrollable variable として人種や性向とともにみなし、それにより生じる格差も是正するべきではないだろうか。また、生来の性質の良し悪しやどのような性質が利益につながるべきかをどう決定するのか。例えば、ダウン症の人は資本主義社会で重視されるような伝統的な意味での知恵やかしこさはないかもしれないが、このような人たちの持っている正直さや固有な性質が重視され、利益をもたらす社会を構想することも可能だ。ロールズの正義は、結局は資本主義社会の原則を前提として競争による生活を絶対と置いており、従来よりもフェアではあり、弱者に優しくはあるものの弱肉強食で強者が高められる社会の構想で終わってしまっていないだろうか。

ノージックは権限理論で人間が正当に権限を得る三つの方法を取得の原理、移転の原理、矯正の原理という風に規定しています。取得の原理では今まで誰も取得していなかったものを、その取得によって周りの人間の状態を著しく悪化させる（例えば水源を独占して他人が飲めなくするなど）ことがない限りその取得は正当であるとします。ここで、例えば広大な土地を取得して一つの村の食物の主要部分を供給していた（それもちゃんと周りが買える値段で、つまり周囲の状況を著しく悪化させないで）とします。この時、その土地の主が何かの理由で食物の生産をやめ、その結果村人の多くが上に苦しむ結果になったとします。この時に生じる不平等や弊害をノージックの最小国家では克服できません。土地の取得は正当であったため矯正の原理は機能せず、リバタリアニズムでは個人の自由を消極的にしか取り締まれず、食物を生産しろと積極的に命令できないため、ノージック的観点からしたらこの状況は正当だと認めるしかないのでしょうか。

社会保障を考える際、それがその原理上、個人の自立性を損なうものであっても、自律性を損なうものであってはいけないことが重要です。特に性の脆弱性の観点から具体的な他者に依存してケアを受けることはその他者から支配される関係へと容易に転化しうるので、このようなケアを非人称的な制度によって享受することで自律性を保つという考えがあります。しかし、今の日本などを例に見ると、世間一般の意見として社会保障を受ける老人や生活保護受給者などを国民の税に依存しているフリーライダーとして批判するみかたが比較的強くあります。このような世論や国民の意見があると、社会保障を被っている人間は社会保障や公共の課題について自らの意見を主張しにくくなり、その自律性が損なわれてしまう危険があるように思います。社会保障受給者に批判的なこういった意見が強い環境で自律性を保った社会保障は可能でしょうか、そして現在の日本はその観点から評価するとどうでしょうか。

もうすでにアメリカなどの政治は熟議型民主主義に近いものではないでしょうか。アメリカ合衆国のニュースでは政治的に完全に中立的なものは珍しく、ほとんどの場合民主党派と共和党派に分かれ、それぞれ非常に政治性の高いニュースを報道しながらパネルでそれを熟議する機会も多く設けています（CNN、Fox）。それを常に見ているアメリカ人もこのような政治的討論に慣れていることが多く、また頻繁に家庭内でも政治について話し合う文化が存在します。そんなアメリカの両極的分断を見ると、熟議型民主主義のコンセンサス形成能力は疑わしいと言えないでしょうか。

ロールズは各国民衆間の機会均等が第二の原初状態での各国民衆の公正な代表によって実現されているとしている。第二の原初状態では、一国家の民衆は単一な性格を持つと想定されていますか（例えばA国では皆リベラルな民衆、B国では皆decent people)。それとも、それぞれ自分の属する国家の集合的性格がわからない上で、個々の性格に応じてリベラルやそうでないという区別がされてその上で議論を進めるのでしょうか。  
また、リプセット仮説やアンセル、サミュエルズのエリート競合論など、民主化には経済発展が必要とする有力な説も多く存在します。リベラルな民衆とは民主主義の理念を強く持つ民衆ですので、経済的に豊かな人民ほどリベラルな民衆になると言えないでしょうか。だとすると、原初状態においてリベラルな民衆にばかり力を与えて万民法を議論させることは比較的富裕な人間のアリストクラシーと言えないでしょうか。

現代の人間社会は男性中心の社会として形成され、社会内で優先的な視点（その社会の価値や規範、ラカンの言うOther)は男性の視点であった。男性は女性を自らとの最も大きな差異、つまりセックスの差異によって定義づけ、女性を本質的に性的な存在として捉えながら、同時に資本主義社会の台頭により女性を生産の道具、個人が私的に所有する財産として（そしてその財産の本質をセックスに見出して）扱ってきたため、女性のセクシャリティは誇張されたと同時にそのセクシャリティをピューリタン的倫理観、資本主義の精神といったもので抑圧してきた。今、女性に世俗内禁欲を押し付ける姿勢に対して、女性の性的表現（体の露出など）の自由を訴える事例が多く出てきており、同時にこれらの表現を性的として捉えること自体（女性の胸のセンサーシップの例で見られるように）男性が女性や女性の体をセックスによって定義づけている、男性の一方的で支配的なおごりとして批判することが増えてきた。近年、このリーズニングが女性による従来「性的」と捉えられてきた表現の正当化に使われており、性の商品化とも受け取られる行動を正当化するレトリックとしても用いられます。もちろん、自らの性に対する自由は万人に保障されるべきであるので性を商業利用して利益を得ることは自由なのですが、この性の商品化が女性を性的存在として強調してそれを性的に捉える社会の男性的視点を強めているのではないか。そうすると、性の表現の適切なバランスはどこにあるのか。